
＋ 学園アリス ＋ 佐倉蜜柑の双子の姉は狙われし、危険人物

水影蘭架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十学園アリス十佐倉蜜柑の双子の姉は狙われし、危険人物

【Nコード】

N3236BA

【作者名】

水影蘭架

【あらすじ】

幼い頃・・・全てのアリスを手に入れた主人公、佐倉梨乃。不安でいっぱいだった少女に、手を差し伸べたのは他界したはずの叔母だった。

家族を守る為、家出をした梨乃。

そして12歳の女の子に迫る謎の組織たちとは・・・？

設定

「名前」 佐倉梨乃

「仮名」 篠崎梨乃

「年齢」 12歳

「誕生日」 5月23日

「身長」 152cm

「体重」 31kg（かなり痩せてる方。

「アリス」 全てのアリスを使う。

だが人と喋るのは余り好きでなく、“飛剣のアリス”を使つて会話している。

「容姿」 スカーレット色の髪に、長いストレートの髪を下の方でカールしていて、ポニーテイルにして縛っている。

「主人公について」

板を使つて話すのは、謎の組織軍に声で正体をバラさない為でもあった。

唯一正体を佐倉梨乃だと知っているのは、鳴海とベアの二人だけであった。

ペルソナの事を危険人物視している。

いつも十字架のペンダントを肌身離さず付けている。

叔母から貰った大切な物で、ペンダントを付けることで

正常になっている。

いつも空中浮遊のアリスを使用して、ホウキに乗りながら移動している時もあり、瞬間移動のアリスを使ってその場から消える事もある。

だからいつも瞬時に場所を移動していて、位置が掴めていない。

元々は父親からの遺伝であって、梨乃にアリスが受け継がれた。

それを知った叔母が他界する寸前に梨乃に十字架の制御ペ
ンダントを託し、他界した。

第一話

私の名前は佐倉梨乃。

仮名、篠崎梨乃。

どうして私がわざわざ仮名まで作っているかと言うと…。

妹を、叔父ちゃんを…大切な人たちを守る為でもあった。

何で私にこんなアリスが渡ったのか…分からなかった。

多分父親からの遺伝的アリスで…でも私にとってはいらないプレゼントだった。

こんなアリスのせいで…私は危険人物視されている…。

ろくに人生を楽しむ事も出来ない…。

まるで誰かに監視されてるような…。

そんな罪悪感な気分だった。

いつも思っていた…。

暗闇のそこで…。

(どうして私だけが自由になれないの・・・?)

と…。

すごく憎んでいた。

幸せそつに笑う子供を…私は憎んでいた。

でも憎むより先に…私は家族を守る為何もかもを我慢した。

そんな私が…何でこの学園に。

少し高い木に瞬時して、昼寝をしていた。

どうせその内、見張りに気づかれるかもしれない…と思っても、どうでも良かった。

（瞬時で逃げれば良いし…）と、思っていた。

それに担任とか言う人も来てないし…。

小さな欠伸をした時、私の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「梨乃ちゃあーん！！聞こえてるー？？梨乃ちゃーん？？」

という声が。

眠たい目を擦りながら下を見るとそこには金髪の髪をした、変な男が立っていた。

（無視したいけどなー…私の名前を言われちゃってるしなー…）

と、思いながらも茶色い板に文字を移した。

【誰ですか？ていうか何で私の名前を知っているんですか？】
するとその人は言った。

「僕は君の担任となった、鳴海だよ。君は篠崎梨乃さんだよね？^
」

明らかに作り笑いっぽいんだけどな…。

【へえー担任ですかー…。】

と、写しながら私はピンク色の大きなヘッドホンに耳に付けた。

大スキな歌を聴きながら寝ようとしていたけど…それを邪魔するかのよう、に、鳴海という人が言う。

「君は、アリスだよなー？」

【アリス？…あー…あれね。】

「やつぱり…君をわざわざ呼んだのは、この学園に入学してもらう為なんだよー」

【何で？】

「アリスを持つ物は国から認められているから…それで君のアリスは何かな？？」

【知らない。別にアリスなんてどうでも良いでしょ】

そう写した途端…クスツと鳴海が笑った。

「君の妹さんも同じ事を言ってたよ…“アリスなんかいらへん”ってね」

最後にこう付け足した。

「そうだよね…佐倉梨乃…ちゃん^^」

ヘッドホンを取り、木の枝に座り、黒い瞳で鳴海を睨みつけた。

「何で私の本名を知ってる訳？アンタもZとか言う謎の組織の一員な訳？」

声を低くして言い放った。

本当の声はソプラノ声に似て、少し高かったけど…今回はそうも行かなかった。

「それが君の声なんだね。さっきのはアリスなんだね^^」

「笑ってないで私の質問に答えろ。さもないと殺すぞ」

「そんな恐い事を言わないでよ…。君の妹さんから聞いててね…それでこの子かな？って思ったただけだよ。それに僕はZの組織員じゃないよ？」

「アンタのその態度から誰もがそう思うから。それで今回の目的は

何？」

そう言うと、微笑むのを止め、真剣そうな目で見て来た。

私はまだ睨んでいた。

「さっきも言ったように…君にアリス学園に入学して貰いたくてね…。
ここに居た方が君に安全性は高いと、思うよ？」

【ふうーん…誰にそんな命令をされた訳？】

「命令って言うか…これは僕の意志でもあるんだよ。
それに…君の妹さんも…今、命を狙われているんだ…だから…梨乃ちゃんの力が必要なんだ。」

私は静かに目を閉じて、千里眼で蜜柑の様子を見た。

するとそこには蛭と喧嘩をしている蜜柑が居た。

【どうやら蜜柑は元気に誰かさんと喧嘩してるけど？】

「え！？…あ…その…」

完全に何を言っているかわからない様子だった。

そこで私は条件を出して、入学をしようという事を決めた。

【アリス学園に入っても良いよ。】

「え！？本当？！」

【正し、条件よ。三つの条件を飲んでくれたら、私も入学する。】

「……良いよ。さあ、言ってみて」

「一つ、誰にも私が佐倉梨乃だと言わない事。」

「二つ、私の言うことを聞くこと」

「ちょっと二つ目が…あれなんだけど…最後の一つは？」

「三つ、私のアリスの事を誰にも言わない事。

この三つよ。良い？約束を破る、裏切る、忘れるなんて事があつたら即、アンタの体の骨を一本折るからね」

そう言うと、微笑みながら大量の汗を欠いていた。

「わ…分かった。それじゃー、着いて来てくれる？入学手続きとかもしたいし…」

と言う。

指を鳴らすと、ホウキが現れその上に座ると、下に下りていった。

鳴海と言う人の頭上で私はホウキに乗りながら、風を感じていた。

「……………」

【何の用なの】

「いや・・・ずっとアリスを使っても大丈夫なのかなって・・・」

【あっそ・・・】

質問になんて答えられなかった。

いくらあんな条件を出したからってコイツが言いそうな気がしてたから・・・。

また、あの時みたいに裏切られると思うと・・・

絶対に信用しちゃ行けないって、心のどこかでもう一人の私が言う・・・。

心を開いてようやく信用出来る・・・そう思った瞬間、裏切られる。

それは二度もあった事だった。

「梨乃ちゃん、どうしたの・・・？」

【何でも無い。】

・
・
・
・

・
「だから何なの！！！」

数分後、私は板に映さず、言葉にして言った。

さつきからジツ〜と見やがって…クソ気持ち悪い！！

「え？！い、いや…その…ははは…」

とあたふたしながら、どこかを指さした。

「ここの中に入っててくれるかな・・・？制服とか、書類とかを取りに行かないといけないし・・・
あ、“黒猫”には気を付けてね^^」

と、言いながら急いで閉める。

「チツ・・・」

と軽く舌打ちをすると、ふかふかのソファに座りながら腕を枕変わりにして寝ようと試みた。

「スー……………スー……………」

気持ち良く寝ようとしていた時、

「バリーントー！」

という、窓が割る音がした。

私は心の中で「（無視無視：）」と、思いながら安易に寝ていた。

すると窓を割った張本人が私に気付いたらしく、近付いてきた。

？「何だコイツは・・・」

梨乃「スー……………スー……………」

そいつが私に触れようとした時…

「うわぁあつ！……！！！」

という声が耳元でした。

梨乃「五月蠅いなあ…誰よ、睡眠中の眠りを妨げる奴はー…」

そう言いながら天井を見る。

そこには青色のズボンを履いた男が居た。

第二話

男のくせに泣く奴、いるか？

そんな事を思いながらホウキに乗り、天井に釣る下げている男の顔を間近で直視していた。

「……………うう……………グスッ」

「……………」

「……………す……………すみま「チッ」ヒイツ……！」

こいつ……………これでも男なのか……？

さっきから泣いてばっかで……

腕を組みながら殴りたい気持ちを抑える。

「あの一……………グスッ……………」

【何？】

「その……………これ……………解いてもら……………え……………ませんか……………？」

【悪いけどあんたが私の眠りを妨げるから、解くのは教師が来てからにする。】

そう写しながら下に下りる。

カーペットの上に立ち、ホウキを消すとその男が泣き出した。

「あ、あの…っ…!!…お願いします…!!…僕は…退学をしたくない…んです…!!…」

私は無視しながらさっきのソファで横になった。

（どうぞご勝手に喚いていて下さい。）と言つかのようにヘッドホンを付けた。

「お、…お願いします…!!何でも言う事を聞きます…!!…ですから…退学とかにだけはさせないでください…!!…グスッ」

音楽を聞いていてもコイツのせいで休むどころか…

指を鳴らし、ホウキを出し、そいつの頭近くに上がった。

【何で一々“退学”にこだわる訳？】

「…俺の家は…貧乏なんです…お母さんに無理をさせないように、と思って…アリスを持っていた僕は…この学園に入って、貰ったお小遣いを毎月、実家に送って行ってます…」。

そのおかげで…母さんも今は、元気に過ごしているようで…僕にとっては嬉しいんです。

だけど…退学をすると、もう助けられなくなるんです…お願いします…!!母さんたちの為にも…!!…」

そう言いながら吊るされているのにも関わらず、鼻水を垂らしている。

「はあっ…」と、一息付くと目を閉じ、腕を組みながら言った。

【今回は許してあげる。だけど必ず、この飯は返して貰うからね。】

「は・・・はい!!」

嬉しそうに言う中等部らしき人。

私が一番天辺まで上がると、人差し指の先に炎を灯し、ロープに近づける。

すると…

「ボオオッ!!!!」

と、燃え上がった。

「え?え?えええっえ!??!」

と、その人が言いながら今にでも頭から落ちそうだった。

ロープが完全にまつぶたつになると、私は更にその男に向かって白い光を投げつけると、消えていった。

(奇跡的に中等部とか言う所に到着してれば良いんだけどね…)

と、思いながら今度はこのドデカイ窓の修復に当たった。

私が丸い形に手を合わせると、手の申から灰色の小さな渦が現れた。

それを人差し指に灯し、窓に向かって投げると、割れた破片が元の場所に帰っていき、見る見る内に綺麗に直っていった。

ソファの上で横になっていると、さっきの灰色の渦が私の肩近くに止まった。

パチンツと指を鳴らすと、泡となって消えていった。

その直後に大慌てで鳴海が黒い服と、白い紙を両方の手に持っていた。

【遅いんだけど。何分間、待たせば気が済む訳？】

「アッハハ：ごめんねー…？何か中等部の方で、寮の天辺で寝ている男子生徒が居たからー…」

寮・・・？

ああ・・・あの人か。

その頃・・・

「ぎゃあああああ……！！！！！！！！誰か助けてー！！！！！！！！」

鳴海「えつとー……それじゃー、この制服に着替えてくれる？」

【分かりました。着替えれば良いんですね？】

と、軽く嫌味っぽく言い写し、近くの着替え室で着替え始めた。

無駄に……サイズも一緒なだけ……。

（チツ……あの変態工口教師）

とかも思いながら、私服から制服のポケットの中に音楽器などを移し変え始めた。

全て準備を終えると今度は鏡の前に立ち、自分の顔を見た。

（……サイドだと……バレるかもしれないしね……）

と、思いながら髪紐を解き、ゴムを口に加えながら高い位置で髪を縛った。

そして最後に桜の簪を刺し、カーテンを開けた。

鳴海「準備、出来た……結構似合ってるよ^^」

【はいはい、お世辞は良いから早く済ませて下さい。】

そう映しながら履いていたブーツに、足を通し、チャックを閉めた。

鳴海「あれ……？この学園の靴を履かないの？」

【あれだと足が痛くなるから。それにこのブーツ、慣れてるから】

鳴海「そう……。あ、それとこの書類も書き終えたけど……アリスの所、どうしよっか」

机の上にある紙を見ながら言った。

「飛剣のアリスで良いんじゃない。」

鳴海「飛剣……？」

「飛剣。早く書いて」

そう言うと鳴海が「あ……そうだね」と言い、ペンを動かした。

数十分後。

ようやく書き終え、今度は初等部Bクラスに向かっていた。

勿論私は歩く気にはなれなく、ホウキに座って飛んでいた。

それを驚きながら見る鳴海。

鳴海「あ、ここだよ^^」

(ドアからしてでかつ!!)と、心の中で思った。

「そつだ…。私はこれから喋らないから…適当に言っておいて。」

鳴海「え?……………あ、うん(汗)」

【それじゃ、よろしく】

そつ映すと、地面に下りてはホウキを消した。

流石にいつまでも乗っていると…ギックリ腰になっちゃったというか…。

鳴海がドアを開けると一瞬にして、五月蠅くなった。

いや…五月蠅いのは廊下にて、分かってたけど…ここまでエコーしているとは…、

流石、エスカレーター式、国から認められた小、中、高が合体しているだけでもあるねーwww

鳴海「はぁーい皆ー!静かにー!」

「「「「「ガヤガヤガヤg」」」」」

こいつ…これでも教師なのか…??

と、言いたくなるけど…余り言葉を発する訳には行かない。。

嫌でも我慢…我慢…。

鳴海「はぁーい皆ー、静かにー」

一向に静かにならない…。

（うぜえーんだよ黙れ黙れ黙れ黙れっ！）と、どす黒い殺気を出していた。

鳴海「え？；梨乃ちゃん？？；」

私は黒板前に立ち、爪を出し黒板に当てた。

そして…。

「「「ギイイイイイツ」」」

「「「いやあああつああ！！！！！！／やめろおおおつお！！！！！！！！」」」

パンパンツと手を払うと、鳴海を睨んだ。

鳴海「ようやく静かになったねー…えつとー、こちらが転入生の篠崎梨乃ちゃんです^^」

（おい…テメーら何睨んでんだよ…殺んのか！？）と、心の中で思っていた。

すると鳴海が黒板に大きく、『篠崎梨乃』と書き上げた。

鳴海「えっとー、梨乃ちゃんは今日来たばかりなのでー、色々教えてあげて下さいねー。」

あ、それと…梨乃ちゃんは、ある事情で声を出す事が出来ませんが…そこは…手を差し伸べるなど、してください。
はい、梨乃ちゃんに対してー…質問はあるかな？」

すると一番後ろの席に居た人が手を上げた。

「はぁーい！先生、篠崎さんは何のアリスなんですかー？」

鳴海「あー…えっとー…」

梨乃「小声」 適当にスルーしておいて。」

鳴海「小声」 え！？ちよっ…梨乃ちゃん…」

「先生ー？で、何ですかー？」

鳴海：「あー…えっとー…」

鳴海：「それは…、また後で分かるかな。」

（おおwナイスw）

「「はあ?」「」

とか不満の声を上げる人達。

第三話

だけどその中で、一人だけ違う反応をする人が居た。

…一人じゃないか。

……約、2名だけ違う反応をする人たちがいた。

蜜柑「り・・・の・・・？」

蛭「……………」

それは紛れも無く…蜜柑と蛭だった。

本当にここに居たとは…。

鳴海「……………えっと、梨乃ちゃんの席はー…一番後ろだね。一つ空いてるでしょ？棗君の隣だから^^」

誰にも聞こえないぐらいに軽く舌打ちをする。

そして歩き出す。

(ジロジロ見てんじゃねーよー!!)(裏、梨乃)

一番後ろの席に辿り着く。

?「よろしく、篠崎さん。」

（あー、はいはい。よろしく。）と、心の中で思った。

発する気、0だし。

私が座ると、隣から・・・の人のペットが、私の膝の上に乗った。

？「あ！・・・」

ずっと見ているとウサギが何かを言いかけていた。

『どうしたの？』

『君はダレ？』

『私は・・・梨乃。りのつて読んで』

『りのつち・・・』

『え、いや、“りの”だよ？』

『りのつち！』

この時私は思った。

何て我儘なんだ・・・と。

私が撫でて、持ち主に帰すと何故か・・・微笑みが返って来た。

？・・・「あ・・・」

あー…視線がかなりうざい。

? : 「あ…俺、乃木琉架。よろs()」「五月蠅いなあー…」は…?」

つい、喋ってしまった()(汗

前の席「五月蠅いんだよ…静かにしてくれないかな?」

アリスを使って、前の席に居た男子の体を借りた。

するとその人が大量の汗を流しながら、腕を前に降っていた。

「お前…流架さんに…」

「いや! 違うんだ! それは…」

(どうだどうだ(笑) 思い知ったか! W私のアリスをWWW)

そう心の中で思っていた時、誰かがやって来た。

「篠崎さん。僕は学級委員の飛田祐です。そしてー…」

「今井蛍です。」

「僕たちは鳴海先生から色々と教えるように言われているんだ。」

(は!?) と思って教卓の方を見ると、そこにはさっきの奴の姿は無かった。

梨乃「よろs()」「おい…新入生…」チッ」

棗「お前、どんなアリスを持ってるんだ」

喋ろうとした時、声がした。

『誰がテメエー何かに喋るか。この糞猫』

ああ…読心術か。

『私がどんなアリスを持っていようと・・・』

棗「どんなアリスを持っていようと？」

そこで読心術を使う奴は黙った。

私が心の中で『それ以上言ったら、テメエー殺すぞ』と言ったから…。

？「どうした？」

「いっ…ごめんなさいっ！」

と、笑顔で謝られた。

周りの人達は何がどうなっているか、さっぱり分からない様子だった。

だけどそんな時、KYが現れた。

それは…

蜜柑「篠崎さん。ウチは蜜柑って言うねん。よろしくな」

蜜柑・・・

何で私の前に現れるの・・・？

ねえ・・・何で？

今までに我慢していた気持ちが、、怒りがこみ上げてきた。

我慢・・・我慢・・・。

蜜柑「篠崎さん・・・？どないした？？」

黙ってよ・・・今すぐに私の目の前から・・・消えて！！

蚩「・・・？」

お願いだから・・・消えて！！！！

？：「お前・・・さっきから見れば！！無視してんじゃねーぞ！！」

軽く舌打ちをしながら、そいつを睨んだ。

梨乃「は？」

ここに来てから発した言葉。

良いよ・・・後で記憶を消すから。

正田「貴方ねえー！！新入りだからって調子に乗らないでよ！！ルカ君がよろしくって言うてるのに・・・無視するなんて、最悪よ！！」

？「そうよそうよ！！ファンクラブでもある私たちが許さないわよ」

委員長「ま、待って皆！！喧嘩は「だから何？」梨乃・・・ちゃん？」

梨乃「だから何？」

私はもう一度、静かな声で言った。

「「は！？」」

梨乃「アンタ達、嫉妬してんの？」

この人に話しかけて貰えないからって嫉妬して人に当たる訳？

それは偉いご苦労だねー。ファンクラブだか何だか知らないけどさー、本人たちの許可無しでそんな甘ったるいクラブを作るの、辞めたら？

ある意味ストーカーなんだけど（笑）」

その言葉に二人が顔を赤くした。

「「な・・・何よ！！アリスなんか持っていないくせに！！」」

そう言った時だった。

私の怒りが頂点に達した。

片方の手を上に上げると、その人達の周りには刃物や、剣の刃たちが彼女たちに向かっていた。

梨乃「さあ…これでまだ何か言い残す事はない？」

正田「な！？何をする…つもりなの…！」

梨乃「あんたたちを“殺す”つもり。」

「おい！！やめろ！！」

梨乃「部外者は黙ってる！（ギロツ）」

数人の女子が教室から出て行こうとした時、金縛りのアリスを使って、全ての至る所に鍵を掛け、固くした。

「っし、正気なの…？」

梨乃「ええ。正気よ。私は数々の人間を殺して来た。だからアンタ達を殺すなんて…容易い事よ。」

そう言った時だった。

「いい加減にしろ…！」

私のすぐ後ろに居たのは日向棗だった。

私が左手で催眠術をかけると、日向棗以外の人達が全員倒れた。

日向「!?!?!?何をした!!」

梨乃「“催眠術”に“記憶消失”」

日向「記憶を消す必要があんのか……?」

梨乃「ええ。あるわよ。」

まあ…アンタにも寝て貰わないと、私の正体がバレちゃうから…」

日向「待て!!」

梨乃「悪いけど私命令されるのが嫌いなのだ。」

ホウキに股がり、煙を日向棗の方に撒き散らした。

そして…煙を全て、取り除くと…やがて数分後に皆が置き出した。

私も一緒に寝ていた…という事にして、乃木流架の隣で寝ていた…という事にした。

委員長「あれ……僕たち、何をしていたんだっけ……?」

そしてさっきのようなやり取りが行われた。

最終的には…日向棗が最悪な条件を出して来た。

『お前が一週間以内に馴染めなかったら即効退学だ。だが…チャンス(ry』

とか長つたらしい話も聞き終え、私は北の森の入口前に来ていた。

そして何故か・・・委員長、蜜柑もやって来ている。

今すぐにも消えてほしい・・・。

だけどいつまでもずっと、こう思っている訳にも行かない…。

そう思うと、我慢をした。

拝啓、お祖父ちゃん。

何ヶ月ぶりかな・・・、私は今でも元気にやっています。

お祖父ちゃんは幼い頃、私に“嘘はあかで”と言ってましたよね・・・。

私、今日・・・嘘を付いてしまいました。

それと・・・お祖父ちゃんと蜜柑には、すつごく迷惑を掛けたのは・・・分かってます。

でも・・・二人を守る為でもあつたんです・・・。

また、会えたら・・・良いですね。

b y、梨乃。

第四羽

「IN北の森、入口」

委員長「梨乃ちゃん!! 気を付けて行動しようね・・・!」

気を付ける必要・・・あるの?;

何か出て来た時は・・・適当に燃やしちゃえば良いでしょ(笑)

いや…駄目か。

【分かった。私も気をつけるね。】

と、板に写した。

蜜柑「今の何や?? すごいなー!!」

【飛剣の“アリス”】

蜜柑:「へ・・・?」

「ア、アリスううう!!!!???!?」

委員長「どうしてそれを素君たちの前で言わなかったの!？」

【私、アイツ嫌いだから。だってさー…急に話したり…ファンクラブとかが話の中に入って来たりって・・・】

蜜柑「でも・・・ウチのアリスよりすごいやん!!」

【あ・・・ありがとう・・・】

蜜柑「なんやねん!!今の間!!」

そんな事を会話しながら奥深く・・・進んでいくと、突如変な音が聞こえ始めた。

蛭「早速変なの出た」

すると二人が声に出して言った。

「「ベアー!!?!?!?!」」

と。

私はゆっくり近づいていった。

蜜柑「しししい篠崎さん!!?!」

委員長「りりりりり梨乃ちゃん!!危険だよ!!!!」

【大丈夫、全然大丈夫】

背後にメモを残しながら、しゃがんで優しく微笑みかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3236ba/>

†学園アリス†佐倉蜜柑の双子の姉は狙われし、危険人物

2012年1月8日20時52分発行